青柳園だより

令和５年
２月号
文京区立青柳幼稚園

冬の自然の中での学び

主任　今村 久美子

１月の下旬から厳しい寒さが続いています。園庭では、冬の栽培物や自然事象を通し、様々なことを発見し学んでいる子どもたちの姿があります。

4歳児もも組の子どもたちは、冷え込んだ朝、たらいの水が凍り、大きな氷が張っているのを見付けました。

「氷ができてる！」「つめたーい！」集まってみんな大騒ぎ。A さんは、何度も氷を光にかざしてキラキラ光る様子を見ていました。B さんは、手にした氷が冷たくてガシャン！と大きな氷を地面に投げ落としました。氷はパリンと割れます。すると、割れることに興味をもったようで何度も繰り返し、落とすと割れて細かくなる様子を「ほら、やっぱりね」と言わんばかりの表情で見ていました。C さんは、その氷のかけらの上に片足を乗せ、「スベル～スベル～」と歌うように言い、足を滑らせていました。

これらは、子どもたちが、それぞれのやり方で、自分の「からだ」を通して、氷というものを知っていく姿です。

５歳児ゆり組は、冬の畑で、種まきしてから毎日水やりや雑草とりなど自分たちで世話をしてきたダイコンを収穫しました。外側の葉が地面についたダイコンを確認し、「こうなったら収穫できるって図鑑に書いてあったね！」と納得して、収穫の時を迎えました。たくさんのダイコンを収穫し、じっくり見たり、並べて数を数えたり、大きさや長さを比べたりする姿がありました。

試食する際には、“どうやらダイコンは部位により味が違うらしい“という情報を得てきた幼児の意見をもとに、部位別に食べ比べしてみることにしました。「確かに下は辛いな」「真ん中と上は甘い！」と自分なりに納得しながら食べ比べを楽しみました。「シャキシャキした」「カリカリする」など、食感も言葉にしていました。

栽培物に愛情をもって関わりながら、生長の過程、大きさや味の違いなどに気付き、そのことを自分なりの言葉で表現している姿です。

自然物や自然事象に触れて心が動かされる経験、感じたことや気付いたことを自分なりに表現する経験、そしてそれらを先生や友達と共有し認め合う経験は、小学校以降の学びにつながっていきます。自然に関する学びでいうと、生活科や理科といった教科の学びの基盤となる実体験になるでしょう。

幼稚園では、子どもたちが自然の中で様々な対象に関わって、自分の「からだ」で感じ、心が動かされ、考えたり気付いたりする過程や、「なぜだろう」「不思議だな」と感じる心を大切に受け止め、学びの芽生えを育んでいきたいと思います。

もも組
氷を割ってみたよ！

ゆり組　ダイコンの収穫